

# 村木新次郎著 『日本語の品詞体系とその周辺』

(ひつじ書房刊、平成二十四年十一月)

彭 広 陸

本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第一〇一卷として刊行されたものである。ちなみに、ひつじ書房から最初に出たのは、著者による日本語研究叢書の第一期第一巻なる『日本語動詞の諸相』であった。前者の出版から本書の刊行に至るまでは、二

詞を超え、日本語のすべての品詞にわたって、文の成分を重視する視点から広く日本語文法に関わる問題を取り上げ、その体系を説いたものである。本書の構成は下記の通りである。

## 目次

一年の歳月が流れている。本書は正にその間の著者の日本語文法に関する研究成果の集大成とでも言うべきものであろう。

### 第1部 日本語の品詞体系をめぐる諸問題

著者の前者からたたくさんのことを学んで育った評者が本書の

書評を書く機会を得たことは大変おこがましい限りではあるが、

同じ志を持つ一学徒として忌憚なく私見の一端を述べさせてい

ただきたい。

前著が専ら日本語の動詞を扱っているのに対し、本書は、動

第1章 日本語文法研究の主流と傍流——単語と品詞の問題を中心に——

第2章 日本語の品詞体系のみなおし——形式重視の文法から意味・機能重視の文法へ——

第3章 文の部分と品詞

第4章 意味と品詞分類

第5章 漢語の品詞性を問う

第6章 四字熟語の品詞性を問う

第7章 日本語の名詞のみなおし——名詞のようで名詞でないもの

第2部 形容詞をめぐる諸問題

第1章 日本語の形容詞——その機能と範囲——

第2章 名詞と形容詞の境界

第3章 「がらあき」「ひとかど」は、名詞か、形容詞か

第4章 第三形容詞とその語構成

第5章 第三形容詞とその意味分類

第6章 形容詞における単語内部の並列構造と属性化

第7章 「神戸な人」という言い方とその周辺

第3部 従属接続詞をめぐる諸問題

第1章 日本語の節の種類

第2章 「矢先」と「手前」——「もの・空間」から「つながり」へ——

第3章 擬似連体節をうける従属接続詞——「かたわら」

と「一方(で)」の用法を中心に——

第4章 〈とき〉をあらわす従属接続詞——「途端(に)」

「拍子に」「やさき(に)」などを例として——

第4部 感動詞の問題

第1章 意味・機能にもとづく日本語の感動詞の分類

第5部 単語とコロケーションをめぐる諸問題

第1章 日独両言語の単語をめぐる諸問題

第2章 中国語の形容詞が日本語の動詞と対応する中日同

形語について

第3章 現代日本語の中の四字熟語

第4章 コロケーションとは何か

第6部 日本語文法の展望

第1章 三上章と奥田靖雄——それぞれの軌跡——

第2章 日本語文法研究の展望

参考文献

あとがき

事項索引

人名索引

一見して分かるように、本書で取り上げられている内容は多岐にわたっており、著者の研究者としての視野が広いことが窺える。日本語文法に対する著者の基本的な立場は、第一部第一章「日本語文法研究の主流と傍流——単語と品詞の問題を中心に——」に余すところなく展開されている。これは、二〇〇九年一〇月に開催された日本語学会秋季大会の公開講演として発表したものを文字化したものである。

日本語の品詞体系が本書の中心的なテーマとなっているのだが、品詞の問題を取り上げるにあたって、単語とは何か、という根本的な問題が避けて通れない。「単語の認定にあたって、語彙的なもの（内容）と文法的なもの（形式）を切り離して、そのどちらも単語としてあつかう」（まえがき）と、この学校の文法と日本語教育文法とは違って、著者は、「単語は、基本的に、語彙的な側面と文法的な側面があり、その統一体として存在するという見方を」（同前）支持している。こういった著者の立場は、ぶれることなく、一貫している。そして、奥田靖雄をはじめ、鈴木重幸、高橋太郎、宮島達夫、鈴木康之らを中心的なメンバーとする言語学研究会の立場（いわゆる教科研文法）と軌を一にしている。同じ立場を取る学者が今日の日本の

学界では、残念なことにな少数派であると言わざるをえないのだが、一般言語学の観点から見れば、その主張はむしろ正当であると言わなければならないまい。学校文法も日本語教育文法も品詞を正しくとらえることができなかつたとすれば、それは単語の認定に間違いがあつたからである。

「わたしの主張は、形容詞を従来のものより広くとらえること、後置詞とあわせて、従属接続詞を日本語の品詞体系の中に位置づけることである」（同前）とあるように、本書の主な研究対象は、形容詞・後置詞・従属接続詞といった三つの品詞となっている。

学校文法では、「形容詞」の他に、「形容動詞」という品詞も立てられている。教科研文法となると、両者とも「形容詞」として扱われ、そして、前者が「第一形容詞」、後者が「第二形容詞」と呼ばれている。日本語教育文法では、名付けこそ異なるものの、同じとらえ方がなされている。ただし、形態を重視して、それぞれ「イ形容詞」「ナ形容詞」と呼んでいるのである。それを踏まえて、本書の著者が「第三形容詞」の存在を主張することは注目値する。

従来、名詞として扱われてきたものの中には、格の範疇（格

変化)を持たず、連体修飾を受けることもない一群のものがあ  
る。品詞分類の基準となる構文的機能の観点から見れば、そう  
いったものは、規定成分・述語成分・修飾成分として機能する  
点で、形容詞として見なければならぬと、著者は論じている。  
例えば、「抜群の成績」は、「彼の成績」「数学の成績」  
と形の上で共通しており、そしてどちらも連体修飾語とはなる  
ものの、前者は「すばらしい成績」「優秀な成績」と同じ  
ように属性規定となっているため、後者のような名詞の連体形  
(ノ格の形)による関係規定の場合とは一線を画すべきだとい  
うのが著者の主張である。「すばらしい」「優秀な」がそれぞれ  
「第一形容詞」「第二形容詞」であるのに対して、著者は、「抜  
群の」を「第三形容詞」と呼んでいる。「の」の形で連体修  
飾語、「の」の形で連用修飾語、「だ/です」の形で述語に  
なるということは、いわゆる第三形容詞の形態論的・構文論的  
な特徴とされている。著者によって俎上に載せられた第三形容  
詞については、かつて田丸卓郎や三尾砂の文献にも僅かに触れ  
られているというが、語構成・用法・意味分類など多方面から  
アプローチして体系的な研究を行ったのは著者が最初である。  
そして本書に挙げられている語例(二二〇～二三七頁)を見れ

ば分かるように、第三形容詞に帰属させるべきものは決して少  
なくはない。著者の主張は傾聴すべきである。むしろこういっ  
た問題は長い間無視されてきたことが不思議なくらいである。  
著者の上記の研究は、従来の「形容詞少数説」を見直すきつ  
かけとなりそうである。

後置詞に関する著者の考え方が各章に散見されるが、その論  
述も見逃せない。松下大三郎(『日本語俗語文典』一九〇二)・  
鈴木重幸(『日本語文法・形態論』一九七二)・鈴木康之(『日  
本語文法の基礎』一九七七)・高橋太郎他(『日本語の文法』二  
〇〇五)などでは、すでに「後置詞」という品詞が取り出され  
てはいるが、それを理論的に位置づけられたのはやはり  
著者の論述に負うところが大きい。ここで問題となる「後置  
詞」というのは、「実質的な意味をもつ名詞に後置する補助的  
な単語で、その名詞と後続する動詞などの実質的な単語とを関  
係づける役割をはたす機能語である(二九頁)。具体的には、  
「(日本に) 対して」「(彼と) とともに」「(大衆を) 前に」と  
いったものを指す。

それに対して、日本語教育文法では、「にに対して」「につい  
て」「をめぐって」「として」などを一つの単語＝機能語と見な

して、「複合格助詞」または「複合辞」という呼び名を与えている。「複合格助詞・複合辞」という名付けがほぼ定着しているように見えるが、その扱いは妥当だろうか、考え物である。まず発音から見れば、「日本 に対して」ではなく、「日本に 対して」の方が自然であり、つまり、「日本に」と「対して」の間に音声上の切れ目があるのであって、このことは「日本に」と「対して」とは別々の単語であることを物語っている（二七頁）。そして、両者はそれぞれ独自のアクセントを持っている。更に表記から言っても、分かち書きをする場合は、通常、「日本 に対して」ではなく、「日本に 対して」となるのも事実である。このように、名詞の格形式を支配するという後置詞への見方のほうが妥当であることは言うまでもない。

従属接続詞も著者の研究課題の一つである。「従属接続詞」とは、『節や句をまとめる述語（動詞・形容詞と名詞十コピュラ）とくみあわさって、その節や句の後続の主節に対する関係をあらわすために発達した補助的な単語』と規定されるもので「ある（二七頁）。例えば、「山口は小学校の教師をするかたわら、自分でも絵を描いている男である。」（二九四頁）、「山本が自民の公認を得た一方で、武田が無所属での立候補を表明。」

（二九八頁）における「かたわら」と「一方で」である。

前掲の鈴木康之著『日本語文法の基礎』では、「従属接続詞」のことは「接続詞的な後置詞」と呼ばれ、後置詞とは區別して考えるべきだとされている。高橋太郎他著『日本語の文法』でも、「つきそい接続詞」という品詞が立てられている。本書ではそれについて詳細に論述されており、品詞としての「従属接続詞」への理論付けに成功している。

著者が「後置詞」「従属接続詞」「接続詞」などの品詞を連続的にとらえている姿勢は高く評価すべきである。一方、例えば、「従属接続詞」と「接続詞」とでは、両者の構文的な機能はいずれもいわゆる「接続」である。接続という共通点に注目して、両方とも「接続詞」という品詞に帰属させ、そして、独立的なもの（従来の「接続詞」に相当するもの）と膠着的なもの（著者の主張する「従属接続詞」に相当するもの）という下位分類をしてもよいという見方もあり得るのではなからうか。少なくとも中国語の接続詞（連詞）には、このような二種類のものが見受けられるのである。

そもそも日本語の感動詞についての研究は手薄である。本書の感動詞に関する論述には随所に新しい知見が見られる。著者

によって提示された感動詞の意味・機能による分類は以下の通りである（三五三～三五四頁）。

I 聞き手の存在を前提としない感動詞

1 (話し手の事態に対する) 感動

1.1 感覚的な感動

1.2 感情的な感動

2 (みずからの動作の勢いをつけるための) かけこえ

II 聞き手の存在を前提とする感動詞

1 話し手から聞き手への対応

1.1 (聞き手に対する話し手の) きもちのあらわし

1.2 (聞き手に対する話し手からの) よびかけ

1.3 (聞き手に対する話し手からの) はたらきかけ

1.4 (聞き手に対する話し手からの) あいさつ

2 聞き手からの発話に対する話し手の対応——うけこたえ

2.1 よびかけに対するうけこたえ

2.2 はたらきかけに対するうけこたえ

2.3 といかけに対するうけこたえ

2.4 のべたてに対するうけこたえ

2.5 あいさつに対するうけこたえ

3 いいよどみ(間投詞)

著者が提示したこの分類は従来の羅列的な分類とは違って体系化されている点に特徴がある。こういった分類は日本語教育にも役立つものだと思う。

現代日本語の中の四字熟語に関する本書の研究(第5部第3章)も斬新である。日本語の文章語では四字熟語が多用されていることは周知の通りであり、四字熟語の辞典も数多く出版されている。しかし、それについての研究は少ない。著者はそれに着眼して新聞を対象に調査している。それによって、「中国の故事成語に由来するものは、あまり用いられていない。よく使用されるものの多くは、日本製の四字熟語である。西洋に由来するものも結構多い。これらのはかに、仏教用語からの四字熟語もみられる。日本語の四字熟語の文法性に注目すると、中国語(漢文)の文法的な特徴をひきずって、複数の品詞にわたるものが多い」ということが明らかになった。

さらに、著者は得意とするドイツ語と中国語を駆使して日独両語の対照研究(第5部第1章)と日中両語の対照研究(第5

部第2章)も行っている。そういった成果は対照言語学研究に貢献するものとして位置づけられるであろう。

なお、第6部「日本語文法の展望」の第1章「三上章と奥田靖雄」では、日本のアカデミズムとは無縁だった三上章と奥田靖雄の両氏のこと、「20世紀後半の日本語文法界を代表する巨匠」(四三七頁)と位置づけられ高く評価されている。卓見だと思う。特に日本語の文法研究に大きく貢献した奥田靖雄の業績を客観的に評価できる研究者が未だにそう多くないことを考えると、なおさら有り難く感じるわけである。

日本語文法研究に携わっている者には、第6部第2章「日本語文法研究の展望」に目を通していただきたい。一言言ではあるが、このように大所高所に立って日本近代以降の文法学史を、手際よく概観できた文章はそれほど多くなかろう。自分の研究もどのように位置づけるべきかを考えさせられるものである。

本書を通して評者が深い感銘を受けたのは著者の文法研究が終始一貫していて、いたずらに流行を追うことをせず、地道な実証的研究を続けている姿勢である。頭が下がる思いである。

本書の内容があまりにも豊富かつ多彩であるため、紙幅に制限のある書評の範囲ではとても全部に言及することができない。「開卷有益」というように、本書を開けば、日本語文法の真髓を極めた論述があちらこちらに散りばめられていることが分かる。前著が日本語学界で広く読まれているのと同じように、本書も十分に一読する価値があることを確信する。日本語文法研究に携わっている者にも、日本語文法研究を志している者にも是非ともお薦めしたいと思う。

(二〇一二年十一月二〇日 ひつじ書房 A5版)

四七八頁、五六〇〇円(税別)